

坂口 二郎



1921年 坂口二郎
(菊池知之編著『新聞人 坂口二郎 大正デモクラシー編』草文書林、1993年より)

はじめに

一九一三(大正二)年四月、福岡県出身の早稲田大学

武道系学生などを中心に、「興国救人」「社会改良」「青年指導」をスローガンに掲げた社会教化啓蒙団体である「青年大民団」が結成された。この青年大民団こそが国士館の母体と言われている。その理由は、国士館が、一九一七年一月四日、青年大民団本部事務所(東京市麻布区筈町一八二番地)内で夜学の私塾として創設されたためである。

その後、一九一六年五月二五日、「青年大民団」は、その主張を発信する機関誌の発刊披露会を日比谷・大松閣で開催し、同年六月一五日、月刊誌『大民』を創刊した。『大民』は、一時『大民新聞』、『生存同盟』と名称変更されるが、一九三九年二月二一日、日刊紙『大民』が発行されるまで継続して刊行された。

月刊誌『大民』の後をうけて発刊された日刊紙『大

浪江 健雄





日刊紙『大民』の題字

『民』は、社長・柴田徳次郎、主筆・坂口二郎により発行された小型版日刊新聞である。「信条」としては「排共産主義 排反動主義 排独善主義」を謳っている。紙面はタブロイド版四頁からなる。創刊当時、柴田は国士館を離れていたが、社長として経営に尽力し、一九四四年まで発刊を続けた。一方、主筆を務めた坂口は、明治末期から太平洋戦争頃まで、読売新聞・萬朝報・中央新

聞・福岡日日新聞などでも活躍したジャーナリストである。

実のところ、この日刊紙『大民』こそが、国士館にとって戦後の最も苦しい時期を支えてくれた人々との繋がりを作ったと言っても過言ではない。つまりは、戦前・戦中に日刊紙『大民』を通して築かれた絆が戦後も引き継がれたのである。そして、そのキーパーソンであったのが坂口である。そこで本稿では、坂口と柴田・国士館との関係をみていくこととする。また、戦前からの支援者が戦後も引き続き支援に応じた理由、また、支援者たちが何を国士館に期待したのかといった点についても考えてみたい。

一 日刊紙『大民』以前

まずは、坂口が『大民』の主筆となるまでのプロフィールを、菊池知之の編著『新聞人 坂口二郎 明治編』（章文書林、一九九二年）所収の「略伝」「坂口二郎略年譜」に拠って紹介しよう。

坂口は、一八八〇（明治一三）年五月二四日、福岡県三池郡宮部村（現大牟田市）に生まれ、橘尋常小学校、銀水高等小学校を経て、一八九九年三月、中学伝習館を

卒業した。その後、同年九月には、京都の第三高等学校に入学したが神経衰弱のために中退し、一九〇〇年九月、早稲田大学の前身である東京専門学校国語漢文及び英文学科に入学、一九〇四年三月に卒業した。卒業試験は二席であり、平均点八三・四四の好成績であった。

翌一九〇五年一月、読売新聞社の前身である日就社に入社し、文芸欄を担当する。後には政治経済の編集主任なども歴任した。しかし、一九〇七年には退社している。これは、竹越与三郎（三叉）^{さんざ}主筆の退社に殉じたと言われている。その後、同年一二月には萬朝報に入社。

一九一四年の山本内閣倒閣運動では、黒岩^{くろいわ}涙香社主のものと編集主任を務め、一日数度の発売禁止も経験した。

一九二〇年三月には、萬朝報で若手を起用するよう人事の刷新を建築したものの容れられなかったことから退社し、イギリス外遊の道を選んだ。同年七月七日、郵船阿波丸にて横浜を出帆。上海、香港、シンガポール、スエズを経由して、九月四日にロンドンに到着する。翌一九二一年五月には一カ月にわたり、イタリア、スイス、オーストリア、ドイツ、フランス等を巡り、同年八月にはスコットランドへも赴いている。そして、同年一〇月、ロンドンからアメリカ経由にて帰国の途につく。この外遊中には、福岡日日新聞に旅行記約一〇〇

回、政治経済評論約一二〇回の連載をした。

帰国後、一九二二年一月、中央新聞社（政友会機関紙『中央新聞』を發行）に入社して編集局長に就任した。

また、外遊中の成果として、同年二月『欧米三十五都』、同年三月『英政界の煩悶』（ともに下書店）を出版し、『中央新聞』夕刊には三月三〇日より五月一二日まで三五回にわたり『新政友会論』を執筆した。七月になると編集局長兼編集長に就任し、一二月には『新政友会論』（中央新聞代理部）を出版している。同書は、政友会の理論的指針として政友会総裁ならびに党員に献ぜられた。

一九二四年六月には中央新聞社を退社し、翌月、萬朝報編集局長に就任した。これは黒岩涙香社主が亡くなった後の萬朝報再建を託されたためであったが、不成功に終わったという。その後、一九二六年八月、福岡日日新聞在京客員（論説担当）に就任、一九三六年に同社顧問となるまで続いた。また、私生活では長い独身生活の後、一九三六年一〇月、五六歳の時に古賀春江（画家）の未亡人であるヨシエと結婚した。一九三八年三月には、かねてより企画していたタブロイド版日刊紙について柴田と相談している。また、同年八月には、新聞協会派遣独伊親善新聞使節団員としてドイツ・イタリアへ赴

いている。

二 国士館関係者との交流と日刊紙『大民』

次に、坂口と『大民』、そして柴田や国士館関係者との繋がりをみていこう。以下、菊池知之編著『新聞人坂口二郎 昭和編』（章文書林、一九九五年）所収の「日記・論説」（以下、「日記」と略す）などを中心に年次を追ってみていくことにする。

坂口と国士館との交流は、『大民』発刊以前より見受けられる。坂口は、一九二九（昭和四）年一月三〇日より六回にわたり国士館における政治学の講義を担当している。また、一九二九年七月二日の「日記」によれば、「柴田国士館長来訪。来年度から国士館に新聞科を置くに就いて相談があった」とあり、学校運営について相談するなど坂口と柴田は公私にわたって親しい関係であった。こうした関係が、後の日刊紙『大民』の発刊に繋がっていく。

すでに柴田は頭山満、徳富蘇峰らを中心とする国士館維持委員会の歴々や、同郷の政財界の重鎮たちからも支援を受けていたが、昭和の初め頃よりは、坂口の関係筋からも多くの支援を得るようになっていったと考えられ

る。なかでも坂口は、戦後に内閣総理大臣となる鳩山一郎との関係が深く、戦前、鳩山が内閣書記官長や文部大臣といった政府の要職に就任すると、坂口は内閣嘱託や文部省嘱託に任命され、スピーチライターを務めた。

また、坂口は徳富蘇峰とも浅からぬ縁をもっていた。蘇峰は、一九二九年一月、資本主である根津嘉一郎との衝突により、自ら創業した国民新聞社からの退社を余儀なくされた。この件について、「国民退社慰労会」に出席した坂口は、現代新聞が資本に圧迫される一現象であるとの感想を述べている。また、同年一〇月、坂口は帰省の車中において、蘇峰の『日本帝国の一転機』（民友社、一九二九年）を読んでいる。その内容は、世界現時の要求は政党政治の常套を超越した人物政治であり、その模範はイタリアにおけるムッソリーニであるというものであり、以後、坂口の論説はムッソリーニに対して好意的論調となった。この読書経験が日刊紙『大民』の信条となる排共産主義の主張に繋がったと考えられる。蘇峰もまた坂口を評価しており、日刊紙『大民』発刊に際しては、緒方竹虎、小坂順造らとともに後援者となっている。そして、日刊紙『大民』は、蘇峰の機関紙的存在となる（以上、菊池知之「解説」、前掲『新聞人 坂口二郎 昭和編』）。

蘇峰の坂口に対する評価は、一九四一年六月二〇日に開かれた坂口の還暦祝（於東京・丸の内会館、会衆一八〇余名）における祝辞に端的に現われている。内藤力三「坂口二郎氏還暦祝」（前掲、菊池『新聞人 坂口二郎 昭和編』、二八五頁）には、蘇峰が以下の内容の祝辞を述べたと紹介している。

現代の新聞はそのことごとく「商品」化され、新聞社は「営業」化され、新聞人は「職業」化されてゐるが、坂口君ひとり、その拠るところの「大民」が「商品」化されず、「営業」化されず、坂口君また「職業」化されずして、真個の新聞人としての真価を発揮されてゐることは喜ばしいことであり敬服にたへない

これこそ新聞人・坂口二郎の真骨頂を端的に言い表したものだといえよう。

三 坂口がつかないだ人脈と国士館の再建

以上の経緯もあり、日刊紙『大民』創刊に際しては、柴田と坂口が共に知己となった人々からの支援を受けて

いる。その様子のいくつかを「日記」からみてみたい。

正午から興津庵で、野田代議士の招待があった。頭山先生、徳富先生の外に、松野鶴平君、柴田徳次郎君と頭山先生令息出席、寛談して三時頃漸く連絡部へ出勤した。（一九三七年一〇月六日）

「前略」午前中、柴田徳次郎君来訪。かねて計画中の新聞創刊につき、徳富先生の勧告を受けて、鳩山一郎氏の出資を勧誘に行ったことを語る。「後略」（一九三八年四月九日）

午後三時半、柴田君と一緒に外務大臣有田氏を訪問して、帰朝の挨拶並に「大民」刷新につき応援を求め、午後六時から電通八階で大民クラブ同志のため、一時間の講演をやり、次いで芝浦の雅叙園で三池柳河先輩同志の歓迎宴を受けた。「後略」（一九三九年一月一四日）

丸ノ内会館で蘇峰先生、岩永同盟社長、小坂順造、緒方竹虎、柴田徳次郎君と午餐を共にしながら、「大民」の編集方針について語り、三時前中座

して、電通ビル八階で、新聞内報子十余名を相手に、「大民」の刷新計画を披露し、「後略」（一九三九年一月二二日）

注目すべきは、ここに登場する野田俊作、徳富蘇峰、松野鶴平、鳩山一郎、有田八郎、小坂順造、緒方竹虎らが、戦後に設けられた「国士館大学維持員会」（一九五二年八月発足）のメンバーとなっていることである。すなわち、彼らは戦後においても柴田および国士館の支援者となったのである。

おわりに

終戦後、GHQ/SCAP（連合国軍最高司令官総司令部）により軍国主義者とされた政界、財界、官界から言論界に至る各界指導者たちは公職を追われた。その中には、戦前より国士館を支えてきた人々も少なからず含まれていた。また、柴田もその一人であった。

しかし、そうしたなかにあっても戦中期に根をもち、保守本流を形成する自由党系の幹部をGHQが公職追放しても何ら影響を与えなかったという評価がある（伊藤隆『昭和期の政治』山川出版社、一九八三年）。例え

ば、アメリカ国務省の在外機関の政治顧問部（POLAD）は、一九四五（昭和二〇）年一月一日の報告書で、「鳩山の党は自由党というよりも保守党と命名した方がはるかによからう。彼は新しいまたは革命的な見地を全く代表していない」と述べている。この評価は、戦時体制の時から変わらない自由党系の保守的性格を言い得ているといわれている（雨宮昭一『占領と改革』岩波書店、二〇〇八年）。戦前の保守勢力は、戦後に受け継がれたことができる。

しかし、戦後、保守系の政治家たちは、それまでの思想的背景をもって活動を行うことは困難となった。また、持ち続けていたとしても、違った形をもって臨まねばならなかった。その一方、社会党系の躍進や欧米の自由主義、個人主義の流れもあり、戦前よりの日本の政治思想を重んじてきた保守系政治家や財界人の多くは、ある種の不安、すなわち、日本古来の伝統や道徳までもが失われてしまうのではなからうか、といった想いを抱えていたであろうことは想像に難くない。

こうした時期に国士館では、戦前より変わらず「国の役に立つ人間を育てる」ことを打ち出していた。保守系の政治家や財界人のなかには柴田と親交を持つ者も多く、先に述べた国士館維持員会のメンバーなどから国士

館は期待され、支援を得ていたと言えるのではないだろうか。

坂口は終戦後、蔵書を鳩山一郎に譲って郷里に帰り、一九四七（昭和二二）年に『人間労働史』、翌年には『二十世紀に於ける帝国主義の足跡』（ともに叡智社）を著した後、一九四九年一月、六九歳で亡くなった。終戦後間もなく坂口は没したが、坂口が主筆を務めた日刊紙『大民』を支援する人脈は、戦後における国士館の再建支援の人脈へと受け継がれたのである。